

大丈夫よ！ お母さん！

vol.22

教育コーディネーター 中西美沙子



(今回のテーマ)

かたわ

傍らに、あること

冬の日差しが窓辺にふり注いでいます。傍らで、幼子が絵本を眺めています。時折、思いついたように、かたことで話しながら。絵本が開かれるたびに「親子の安心」が、緩やかにからみあいます。

詩人の岸田杢子さんと画家中谷千代子さんの共作に、絵本「かばくん」があります。中谷さんのおおらかでユーモアをたたえた絵と、繊細な岸田さんの文章が、とてもすてきな絵本です。動物園の一日が親子のカバと小さなカメによって描かれています。そこには小さなものへの驚きがあります。この作品が誕生して何十年にもなりますが、「かばくん」は今も読み継がれています。良い絵本や童話は、子どもの人生を変えようと、私は考えています。「かばくん」のような絵本には、説明ではない自由な感覚があふれています。それは「間」という世界と、どこか似ています。絵と絵の間。言葉と言葉の間にあるのが「間」です。想像力の芽は、そこに生まれ育っていきます。

このごろ「子どもの言葉を先取りする親」を、時々見かけます。小さな子どもが、たどたどしい言葉で「生懸命、思いを伝えようとしているのに、親が「こうでしょう？」と先を取ってしまう。残念でなりません。それは考える力を奪うことになるからです。

私の文章教室に、とても心のやさしい少年がいました。親御さんも立派な方でしたが、その少年には少し、心配なことがありました。それは親が指し示してくれるのを待っている姿です。勉強や遊びのためのスケジュールを、親がすべてマネジメントしているのです。その結果か、少年は自分の取るべき行動が親なしではできなくなっていました。そのようなことも私は「間」の喪失ではないかと感じます。

自分で感じて、自分で考える「時」や「場所」がなくては、子どもは豊かに育ちません。今の私たちは、いわれのない焦燥感の中で生きている感じがします。不況な

どの社会背景だけではない何か、焦燥感をつくっているようです。それは「これで良い」という確信が持てないからでしょうか。

今のお母さんたちは、良い絵本や本をいろいろと子どもたちに与えています。私などは母が買ってくれた幾冊かの本を、すり切れるまで読んでいました。同じ本を何度も母にねだって読んでもらった記憶は、今もかけがえのない思い出です。

以前ですが、「情操教育」としての絵本の意味を説く人たちがいました。絵本や童話を読むことで子どもたちの心が育つという考えです。私はその考えにはどこか違和感を抱きます。「教育」とか「情操の発達」という目的と、絵本を読むこととは、まったく次元が違うと考えるからです。ここからも「間」というものの喪失を思います。見たい時に見て、眠たくなったら閉じる。そんなゆったりとした時の中で、絵本や童話が読まれると良いのにも思います。親と子どもが共にあること。その結び目として、絵本や童話があるのではないのでしょうか。

おやすみ かばくん
どうぶつえんに よるがきた
こっそり ゆめみて ねむってくれ
おやすみ かばくん
ちびの かばくん

※「かばくん」(作・岸田杢子/絵・中谷千代子/福音館書店)より
子どもが夢を見ながら眠りにつく。それを見て喜びを感じる母親は、どんなものにもまして幸福なものです。

Profile

教育コーディネーター
中西美沙子

執筆・講演活動のかたわら、様々な部門の文化事業を展開する「(株)クレアシオン」の代表。文章教室「スコーレ」画廊「キューブ ブルー」「建築プロデュースすまい」「食彩いわさか」ときわ薬局」など。文章教室は書き方を教えるだけでなく、生き方や考える視野を学ぶところです。

☎ tel 053-456-3770

中西美沙子

検索



ピアノシモでね

中西美沙子 著

著書の「ピアノシモでね」(東京書籍)は、中日新聞に連載された人気コラム「つかまえて!こころ」をまとめたもの。同著には、親子の問題もいろいろ描かれています。(税込1,500円)

※お求めは浜松市内の谷島屋で。

